

## *Paradise Lost* における理想的人間像

服部厚子

### An Ideal Type of a Man in *Paradise Lost*

Atsuko HATTORI

叙事詩は、詩人が属する社会や民族上の人物、或いは、歴史的に高潔な人格を「範例」として荘重な文体でうたいあげるものである<sup>1</sup>。「ある特定の特質が特定の人物において具現しているという」<sup>2</sup> 範例は、人々を教え導くのに役に立つ。従って、叙事詩の中で描かれる英雄は人間の1つの理想像であらねばならないだろう<sup>3</sup>。

ミルトン (John Milton, 1608-74) の *Paradise Lost* は、人類の祖たるアダムの神との契約を破って楽園を追放されることをうたった叙事詩である。ミルトンは、*Paradise Lost* の第9巻でこの叙事詩における詩人の意図を述べている。それによると、この詩は従来の英雄詩のように戦いを題材としたものでなく、

the better fortitude

Of patience and heroic martyrdom<sup>4</sup> (IX, 31-32)

という、「自ら英雄叙事詩と称するにたる主題」(IX, 41) をうたうものである。「不屈の勇気や英雄的な殉教の死」がキリストと結びつくのは明らかであるが、この叙事詩はキリストの一生についてうたっているものではない。又、神に反逆したサタンや墮落したアダムの「不屈の勇気や英雄的な殉教の死」を見てとることはできず、彼が人間の理想像を体現しているとは言えないだろう。では、*Paradise Lost* の中で真の英雄とは誰なのか、はたしてその英雄は私たちに理想的な人間として示されているのだろうか。この小論では、*Paradise Lost* における真の英雄が誰であるのか、そして、理想的な人間像がどのようにして語られているかを考察することを試みたい<sup>5</sup>。

さて、伝統的な叙事詩の英雄は武勇や知恵に秀でたものであり、しばしば使命を担って遍歴の旅に出ている。神に反逆して地獄に墜ちたサタンがこれらの資質を備えていることには異論の余地はないだろう<sup>6</sup>。地獄の軍勢の副将ビエルゼバブは、人間を誘惑するために新世界にまで勇気ある旅に行くものを募って次の様に語る。

But first whom shall we send

In search of this new world, whom shall we find

Sufficient? Who shall tempt with wand'ring feet

The dark unbottomed infinite abyss

And through the palpable obscure find out

His uncouth way . . .  
ere he arrive  
The happy isle . . . (II, 402-407, 409-410)

この後サタンが「長く厳しい旅」(II, 432-3)に発って行くのであるから、ビエルゼバブの演説は、サタンが英雄的な行為をするということに私たちの目を向けさせる働きを持っている。彼の新世界への旅は'solitary flight'であっても、航海のイメージで語られ、オデュッセウスのストイックな英雄性に通じるものである<sup>7</sup>。サタン自身、この旅について次の様に決意を述べている。

. . . I go  
This uncouth errand sole, and one for all  
Myself expose, with lonely steps to tread  
Th' unfounded deep . . . (II, 826-9)

サタンは自ら困難なことを試みるという使命感に燃えている。サタンの旅は、御子が一人で人類救済のために地上に降りて旅することと何と似ていることだろう。新約のなかの物語は、ほとんど旧約の中に顕われていて、旧約の予言の正しさは新約でそれが実現されているかどうかによっているというのがタイポロジカルな語りである<sup>8</sup>。サタンはキリストのアンチ・タイプであるという、タイポロジカルな立場から *Paradise Lost* が書かれていることを私たちは見逃すわけにはいかない。サタンがヒロイックに描かれているということは、タイプ=キリストがヒロイックであるということなのである。

ところでこのサタンに唯一人楯ついた天使がいる。アブディエルである。彼は初めサタンの軍勢に居たが、サタンが自分は隷属者でなく支配者であると語りかけるとその非を悟り、信仰に目覚めた：

Among innumerable false, unmoved,  
Unshaken, unsecluded, untterrified  
His loyalty he kept, his love, his zeal; (V, 898-900)

アブディエルは、他の天使たちと同じ様に、“Sufficient to have stood, though free to fall” (III, 99) であるところから、正しき理性を選びとり、偽りの強さを暴いた。神は彼に褒美の言葉を与える。

“Servant of God, well done, well hast thou fought  
The better fight, who single hast maintained  
Against revolted multitudes the cause  
Of truth, in word mightier than they in arms; (VI, 29-32)

アブディエルはやがて、地獄の軍勢との戦いで神の軍勢の名誉ある一撃をサタンに浴びせる。ステッドマンは、アブディエルが英雄の質を備えていて、キリスト教的ヒロイズムの範例とな

っていることを指摘している<sup>9</sup>が、確かに、アブディエルの孤高の姿は荒野でサタンの誘惑に耐えるキリストの姿を連想させるものである。又天上の戦いは清教徒革命と二重写しになっている。アブディエルの姿は、革命に走った清教徒ミルトンの理想像でもあったろう<sup>10</sup>。しかし、彼は天国における最初の叛乱をうたったラファエルの“詩”の英雄たりえても、*Paradise Lost*の英雄ではない。

ブレシングトンにはアブディエルの英雄的な資質についてばかりでなく、彼が叙事詩のコンベンションに則った登場人物の1つのタイプに属することを指摘している<sup>11</sup>。アブディエルは、支配者に楯つき、身辺に迫った栄光ある戦いに異を唱える英雄的行為を低めようとする人物のタイプであると言うのである。そして伝統的な叙事詩の中のこの種の人物として、『イーリアス』のテルテシスが挙げられている。被支配者階級の代表的人物である彼は、戦いに反対したため鞭打たれている。一方、アブディエルはサタンの脅しにもかかわらず、天上での戦いでサタンに最初に剣をうち下ろす栄誉を担っている。サタンを武勲に秀でた英雄とみなすなら、英雄と英雄に対立するものとのあいだにおこるアクションが、*Paradise Lost*では逆になっている。ミルトンは叙事詩のコンベンションを利用しながら、それをパロディー化することによって従来の伝統的な英雄を斥けているのである。

アブディエルはサタンに向かって彼の考えが誤っていることを厳然と指摘している。

This is servitude,  
To serve th' unwise, or him who hath rebelled  
Against his worthier, as thine now serve thee,  
Thyself not free, but to thyself enthralled; (VI, 178–81)

アブディエルの語る隷属に、禁断の木の実を食べたイブに対してアダムがとった態度もあてはまる。「悔いていることを自分の意志で選んだ」(IV, 71–2) サタンは自分自身が地獄であるという、内なる地獄に苦悩している。アダムは天使ラファエルの語るアブディエルのエピソードを通じて、「立つも墜ちるも自由」であるところから正しく理性を選びとることが理想であり、もしそうしなかったら「自分の奴隷」になるということについて間接的に教えられているのである。神の御意志によって遣わされたラファエルは、天上の出来事を次の様に語る語り部であるからだ。

Yet for thy good  
This is dispensed, and what surmounts the reach  
Of human sense, I shall delineate so,  
By lik'ning spiritual to corporal forms,  
As may express them best, though what if earth  
Be but the shadow of heav'n, and things therein  
Each to other like, more than on earth is thought? (V, 570–576)

ラファエルの語りには歴史にまで言及している。天使ミカエルの話が人類の未来史を含んでいる様に。そして、アダムは墮落後は「内なる地獄」についてミカエルから話を聞くことになる。天上におけるアダムの墮落は天上におけるサタンの墮落と対応しているのである。

さて、神は当初次のようなものとして人間を創られた：

a creature who not prone  
And brute as other creatures, but endued  
With sanctity of reason, might erect  
His stature, and upright with front serene  
Govern the rest, self-knowing, and from thence  
Magnanimous to correspond with heav'n,  
But grateful to acknowledge whence his good  
Descends, thither with heart and voice and eyes  
Directed in devotion, to adore  
And worship God supreme, who made him chief  
Of all his works: (Ⅶ, 506—516)

「聖なる理性」は初めから神によって与えられたものである。そのことを知り、神に感謝し、神を崇める者がエデンにおけるあるべき人間の姿であろう。しかし、*Paradise Lost* はエデンにおけるアダムをうたいあげた詩ではなく、ここで描かれた人間の姿が特定の英雄像と結びつくものでもない。墮落してしまった以上、エデンの外であるべき姿を求めることがアダムには必要であり、それが神の意図したことであろう。

ミカエルに人類の未来史を語られた後、アダムはうつろう時間の内での人間存在のはかなさと人知の遠く及ばない永遠について、さらにそこに神の意志が貫いていることについて<sup>12</sup>理解するに至る。アダムは楽園を出て生きていく決意を固める。

Henceforth I learn, that to obey is best,  
And love with fear the only God, to walk  
As in his presence, ever to observe  
His providence, and on him sole depend,  
Merciful over all his works, with good  
Still overcoming evil, and by small  
Accomplishing great things, by things deemed weak  
Subverting worldly strong, and worldly wise  
By simply meek; that suffering for truth's sake  
Is fortitude to highest victory,  
And to the faithful death the gate of life; (XII, 561—571)

摂理を守り、善でもって悪に打ち勝つこと、又耐えることは勇気そのものであるということ等、ここで語られている生き方は墮落後の人間が守らねばならないことであり、サタンに唯一人立ち向かったアブディエルの姿と重なり合うものである。アブディエルの試練は、理想的人間、地上における「正しき人」の試練の予表であり、アブディエルが神から賜った褒美の言葉は、地上で「正しき人」にやがて与えられることになるはずである。

ミカエルはアダムの決意に対して言う。

only add

Deeds to thy knowledge answerable, add faith,  
Add virtue, patience, temperance, add love,  
By name to come called charity, the soul  
Of all the rest: then wilt thou not be loath  
To leave this Paradise, but shalt possess  
A paradises within thee, happier far. (XII, 581–587)

神の意志を受け入れ、自らの行為に信仰・徳・忍耐・節操・愛を加える様努めれば、サタンが「内なる地獄」に悩み続けたのと異なり、荒野であっても人間は「内なる楽園」を持つことが可能になる。それを可能にした人として、ミルトンによって、逆境であってもそれに耐え克服した *Samson Agonistes* のサムソンや節操の徳でサタンを斥けた *Paradise Lost* のキリストもさらに描かれている。アダムに求められているのは、そして万人が辿るべきは、人間の魂という小さな王国で契約に基づき理性が勝利を治めることである。アダムが荒野へと出て行くその姿は、混沌の中に出て行こうとしたサタンの態度と似ている。さらにその姿は、主教制度に反対し革命への道を選んだ清教徒たちの英雄的行動の予表でもある。もっとも清教徒たちは革命に挫折し、イギリスに新しい楽園を建設することはできなかった。それ故により一層、ミルトンは個人が正しき理性に従って神と契約を結び、楽園を内包することをよしとしたのであろう。

ミルトンは *Paradise Lost* の冒頭で、この詩をうたいあげるにあたって詩神たちに呼びかけを行っている。そこで詩人はこの詩を 'advent'rous song' と呼び、'Things unattempted yet in prose or rhyme' (I, 16) をうたいあげるものだと決意を述べている。「誰も試みたことのないこと」とは、この詩が伝統的叙事詩でなく真の英雄叙事詩だという第9巻の表明につながるものである。ミルトンの創作態度、つまり武勲に秀でた英雄を斥けたことやブランクバースで書いたこと等の叙事詩のコンベンションのいくつかをパロディー化したり、無視したことは、誰も書きえなかった真の英雄叙事詩を書いているという信念——それは信仰とも言えるだろう——に、裏打ちされているのである。

*Paradise Lost* でミルトンが描こうとしたのは、楽園を出て神と新たな契約に基づいて生きていこうとする万人・アダムである。その荒野を歩んでいく理想的な人間像のタイプは、ラファエルの語る天上の叛乱におけるアブディエルやミカエルの語る未来史の中の「正しき人」を通して示された。しかしアダムという反・英雄<sup>アンチ ヒーロー</sup>の理想的な姿は *Paradise Lost* の中では語られていない。

さて、ミカエルはアダムに律法から信仰へと人々が導かれていくことについて説明していた。

So law appears imperfect, and but giv'n  
With purpose to resign them in full time  
Up to a better cov'nant, disciplin'd  
From shadowy types to truth, from flesh to spirit,  
From imposition of strict laws, to free  
Acceptance of large grace, from servile fear  
To filial, works of law to works of faith. (XII, 300–306)

'carnal'な意味から'spiritual'な意味へ、旧約から新約へと人々は教え導かれていく。それが歴史の流れである。「自ら英雄叙事詩と称するにたる主題」をうたった *Paradise Lost* の読者が教え導かれていく手掛かりとなる範例としての理想的人間像も同じ様に語られている。つまり、*Paradise Lost* の理想的人間像はアダムとイブが手に手を取って楽園を去るところ、*Paradise Lost* が終わるところから語りだされることになる。「誰も試みていないこと」とは、実にこのことだったのである。

#### 注

- 1 Ernst R. Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages* (New York : Princeton Univ. Press, 1973), pp. 59-61.
- 2 Curtius, p. 60.
- 3 Curtius, p. 167.
- 4 使用テキストは, John Milton, *Paradise Lost*, ed. Scott Elledge (New York : W. W. Norton, 1975)
- 5 *Paradise Lost* における英雄の問題についてはさまざまに論じられている。筆者が示唆を受けた論文・研究書を年代順に次に挙げておく。  
Frank Kermode, "Milton's Hero", *Review of English Studies*, IV (1953), 317-30.  
C. M. Bowra, *From Virgil to Milton* (London : Macmillan, 1961)  
Mason Tung, "Abdiel Episode : A Contextual Reading", *Studies in Philology*, LXII (1965), 595-609.  
John M. Steadman, *Milton and the Renaissance Hero* (Oxford : The Clarendon Press, 1967)  
John Seaman, "The Chivalric Cast of Milton's Epic Hero", *English Studies*, XLIX (1968), 97-107.  
Francis C. Blessington, "Abdiel and Epic Poetry", *Milton Quarterly*, X (1976), 108-113.  
新井明, 『ミルトンの世界』(研究社, 1980年)
- 6 J. B. Broadbent, *Some Graver Subject : An Essay on Paradise Lost*, (London : Chatto & Windus, 1960), p. 73 ; Blessington, p. 110.
- 7 川崎寿彦『庭のイングランド：風景の記号学と英国近代史』(名古屋大学出版会, 1983年), p. 253.
- 8 タイポロジーに関しては次のものを参照。Erich Auerbach, 原田純訳「中世文学における予表論のモチーフ」『外国語研究：愛知教育大学英語英文学会』11号 (1973年), 181-195 ; Northrop Frye, *The Great Code : The Bible and Literature* (London : Routledge & Kegan Paul, 1982)
- 9 Steadman, p. 145.
- 10 新井明, p. 185. で新井氏はアブディエル型の人間類型こそ「議会側に身を投じて悔いることのなかった時代のミルトンの指標」と述べているが、筆者にはそれが王政復古後のミルトンの孤高をも反映しているように思われる。
- 11 Blessington, p. 108-110.
- 12 大木英夫「ミルトンにおけるピューリタニズムと近代化」(平井正穂『ミルトンとその時代』[研究社, 1974年]), pp. 100-104.